

## 人間形成のリズム論（前編）

共鳴する生命感覚について

三 木 博

### 緒言 問題の所在

ひとは古来から、反復の魅惑に魅了されてきた。とりわけリズムへの関心は、その神秘的な観想をふくめて、きわめて多彩な思索を誘う。近年、リズムの現象は、あらたな視界のもとで生の根源的形象として見直され、生のダイナミズムを貫く原理として注目されている。本稿の主題は、広義のリズム性の視点が、人間形成の理解にもたらず特質の考察である。

われわれはふだん、それと意識するまでもなく、深くリズム性に浸透された世界を生きている。寄せては返す渚の水波、潮の満ち引き、四季の変遷といった自然界のリズム、人間・動物・植物の成長曲線、心臓の鼓動と呼吸の波動、覚醒と睡眠の交替、病の時節的な到来、といった生命体のリズム、音響・形態・色彩のリズム、日常生活における調子の波の繰り返し、ライフサイクルの変遷、文化や歴史の基層に流れつづけるリズム。すなわちリズムは生の躍動に浸透し、時代の気分を規定している。人間自体が、リズムに貫かれた存在であり、リズムは、生の深層のダイナミズムの原理にも呼応していよう。

本稿では、本来きわめて普遍的なものでありながら、同時にまた見極めがたくもあろうとしたリズムの現象、とりわけその実生成的な側面に着目する。そして従来からの考察の視界からは隠れがちであったリズムによる人間形成の一側面を、いささか断片的ながらも提示してみたい。考察の手順としては、リズムの現象に横溢する根源的な生命感覚とも呼べる事態を考察の端緒として、共通感覚あるいは構想力の問題へと連繫させながら、人間形成の具体的なモデルとして考察を進める。

### リズムの生命感覚

「どんな自然の水波も、振子とは明確に異なっている。拍子が同一者を反復しているならば、リズムについては、類似者が再帰していると言わねばならない。ところで、類似者の再帰とは、流れ去ったものの更新を表わすので、簡潔に「拍子は反復し、リズムは更新する」(der Takt wiederholt, der Rhythmus erneuert.)と言える<sup>1)</sup>。ここに引用したのは、精神と生命について特異な思索を展開したルードビッヒ・クラゲス (Klages, Ludwig, 1872-1956) の『リズムの

1) Klages, Ludwig, Vom Wesen des Rhythmus, Verlag Gropengiesser, Zürich und Leipzig, 1944. S. 52. (邦訳『リズムの本質』杉浦実訳, みすず書房, 1994年: 57)。

本質』( Vom Wesen des Rhythmus, 1913 )からの一節である。周知のようにクラゲスは、ドイツ・ロマンティークの人間学ならびに自然観の系譜を色濃く継承した生の思索家であり、その問題設定にあたり、精神 もしくは意識 と生命とのあいだに張り渡された緊張関係、そのダイナミズムを鋭く問うた。そのリズム論においても、精神と自然の連関は、いわば代理的に拍子 ( Takt ) とリズムとの関連として俎上に乗せられ、両者は峻別されている。そのリズム論の趣旨によれば、リズムとは、意識的で人為的な反復運動とされる拍子とは異なっており、無意識的で自然な生命現象の所産である点が強調されている。「リズムとは、普遍的な生命現象であり、生物として当然、人間もそれに関わっている、それに対して拍子は、人間のなす行為である。リズムは、拍子がまったくなくても、きわめて完全なかたちで現れうるが、それに対して拍子は、リズムとの共働がなければ、現れえない」<sup>2)</sup>。クラゲスによれば、あらゆる自然界の周期運動には、両極的持続性 ( polarisierte Stetigkeit ) としてのリズムの脈動が認められ、そこでリズムは、生命そのものとして現象している。「抵抗に対する優位さに応じて、事象や形態をリズム化するのは、生命そのものである。それゆえ、リズムのなかで振動することは、生命の脈動のなかで振動すること」<sup>3)</sup> である。

一般に生命現象としてのリズムの本質を把握するには、その対象の非ノエマ的性格からしても、実証的な考察方法をとるには限界があり、生命直観あるいは生命感覚といった、生の内奥にも通じた、きわめて直観的・体験的・観照的なものを核とせざるをえない。クラゲスの生命哲学<sup>4)</sup> は、その背景を構成しているコスモロジー、シンボリズム、反主知主義などへの傾斜を考慮しても、こうした傾向がきわめて先鋭化している例といえよう。「たんに傍観者であることを超えて、リズムに心を奪われるときにだけ、私はリズムを体験できる。形成者として私は、韻律や拍子をあえて作り出すとする恣意ではなく、まさしく感動によってだけ、リズムを作ることができる。恣意が弱まって、リズムの脈動に乗せられたとき、まさにそのときに、形成者の独自の行為が、リズムを形成する」<sup>5)</sup>。

ここで留意すべきは、拍子とリズムは、単なる対立関係にあるのではなく、両極性の概念が示唆しているように、それらはまた相補関係にもある点であろう。すなわち18世紀ドイツの自然哲学とりわけゲーテ自然学における、牽引と反発、呼気と吸気、収縮と拡張などの根源的両極性の構造がここで反復されて、より高次の存在へと変容していく高昇 ( Steigerung ) モティーフが導入されている。ある条件のもとで<sup>6)</sup>、精神が生命の道を遮断すると、「いわば遮断された

2) ibid. S. 23.( 邦訳 : 22 )

3) ibid. S. 94.( 邦訳 : 103 )

4) 生の哲学者クラゲスについては、上山安敏『神話と科学』岩波書店1984年、参照。

5) Klages, S. 92.( 邦訳 : 101 )

6) クラゲスによれば、リズムは分節的持続性として規定されるが、リズムの持続性とその分節性を上回る場合、拍子の分節性が関与することにより、拍子はリズム価を高めることになる。クラゲスはその例として、走行中の列車の運動、フィンランドのルーネ歌など提示している。“ Von der Taktierbarkeit des Rhythmus ”( 邦訳 第5章「リズムの打拍可能性について」)。

生命事象のうちに、平均を超える圧力<sup>7)</sup>が生じる。リズムは拍子との共働あるいは融合によって、著しくそのリズム価を高めうる。こうした指摘にも、共鳴/共振現象としてのリズムの構造が窺える。

ところでゲーテはその最晩年に、多年に及ぶ植物の形態学的考察から、「生命の基本法則<sup>8)</sup>あるいは生の根源現象(Urphänomen)とも呼べる螺旋傾向(Spiraltendenz)を見出している。「植物においては、普遍的な螺旋傾向が支配的であり、そのために螺旋傾向と垂直的努力とが結びついて、植物のあらゆる構造と形成が、メタモルフォーゼの法則にしたがって成し遂げられる<sup>9)</sup>。垂直的有機構造と螺旋的有機構造は、相互に微妙な均衡を保ちながら<sup>10)</sup>、植物の生を促進し、完成をもたらす。

生理解剖学者の三木成夫氏が指摘するように、こうした螺旋構造はたんに生物界のみならず、自然界のあらゆる渦巻現象に見受けられよう。極大規模での星雲や台風の渦流から、極微規模での神経繊維の渦流や染色体の二重螺旋構造に至るまで、それは四大 地・水・火・風 のすみずみにまで及んでいる。自然のダイナミズムを核心部で構成するこうした螺旋的傾向を、クラゲスの視点から眺めるならば、それは自然の生成の流れ(rheem)の波動・律動としてのリズムであろう。葡萄の蔓から、岸

辺に打ち寄せる水波まで、リズムの原イメージは、その「おもかげ(面影)」を生身の深層体験のうちに刻印している。形態を注視する眼差しは、「ゲーテの蔓からクラゲスの波へ<sup>11)</sup>」と移行し、そこにリズムの原イメージ(Urbild)を直覚している。

さてここで、三木氏の「おもかげ(原形)」論に視点を転じてみよう。ゲーテの形態学あるいはクラゲスの生の哲学の甚大な影響のもと、氏はその独創的な生命形態学の試みにおいて、形態学の理念をきわめて説得的なかたちで具現化している。ここではリズムとの連関を念頭において、その知見を援用してみよう。

たとえば人間の容貌が視覚的に峻別される場合にも、容貌の「個々のかたち」からは識別される「根源のかたち」が備わっていないとはならない。少々長くなるが、引用してみる。「……不断の接触を通して、そうした色とりどりの容貌の変化を眺めやり乍ら、やがて何時とはなく、その相手の顔つきの持つひとつの「かたち」と言ったものを根強く体得する事となる。それは言ってみれば、われわれの肌を通して肉体の奥くに迄浸透し、もはや抜き取る事の出来ぬ程に根を下ろしたその様なものと思われる。従ってそれは、例えば一度その相手から離れた時、忽ちひとつの「形象」として鮮やかに眼前に

7) Klages, S. 83.(邦訳:90)

8) ゲーテ全集:131.

9) Johann Wolfgang von Goethe Werke, Hamburger Ausgabe, Band 13. Naturwissenschaftliche Schriften I. Deutscher Taschenbuch Verlag, S. 135.

10) 「過剰に作用すると、螺旋的有機組織はたちまち脆くなり、損われる。螺旋的有機組織は、垂直的高昇組織と結びつき、両者が合わさって、木質やその他の固いものとして、持続する統一体になる」ibid. S. 133.

11) 『生命形態学序説 根原現象とメタモルフォーゼ』三木成夫,うぶすな書院,1992年:9.

浮かび上がり、振り払う事の出来ないものとなる。このいわば奥裡の形象こそ、その人間の根源の形象、此処でわれわれの言う「原形」そのものとなる事は言う迄もない。古来わが国では、これを“おもかげ”と呼ぶ<sup>12)</sup>。ここには、きわめて直覚的かつ具象的に、「根源のかたち」が表現されている。

「根源のかたち/原形」は、「外なる容姿をとっても、内なる構造をとっても」<sup>13)</sup>、感得されうる。それはまた「凡そ人間の五感を通して肉体に刻印されるであろうどんな印象に関しても、同じ様に体得されるものでなければならぬ」<sup>14)</sup>。さらに自然の“すがたかたち”の直覚的イメージである“おもかげ”あるいは“らしさ”は、イデア観照的なテオリア面のみならず、プラクシス面にも波及している。「運動の習熟、いわゆる「コツ」の習得と呼ばれているものは、要するにその「運動の原形」を体得する事にそれは外ならない」<sup>15)</sup>。運動の微妙なコツや要領を会得することを「呼吸をのみこむ」と表現

するように<sup>16)</sup>、それは呼吸のリズムと運動との内的な共鳴・共振といった現象であろう。こうしたリズムの調律化・同調化の働きを介して、体性感覚<sup>17)</sup>にも浸透するような深い認識がもたらされる。ゲーテの「対象的思惟」(gegenständliches Denken)<sup>18)</sup>などがその例として、挙げられようか。

ところで「個々のかたち」は「根源のかたち(類の原形)」のメタモルフォーゼの変容として理解される。すなわち個々の知覚が生成していく過程において、知覚の「印象像」と「回想像」との二重映しが重層的に累積され、変容され、記憶されていくうちに、「おもかげ」が浮上し、輪郭を際立たせてくる。「この累積された回想像が、実は原形そのものであった事」<sup>19)</sup>を三木氏は鋭く指摘している。累積された回想像の記憶の澱から、鮮明化してくる「おもかげ」、その成立の歴史(なりたち)に遡及すること、このことが「内なる原形を求め唯一の方法論」<sup>20)</sup>である。

12) 同書：193。

13) 三木成夫『人間生命の誕生』築地書館、191-2頁。三木氏は、内部構造である「内なる原形」の解明たる人体解剖学と、「外なる原形の探求」たる造形芸術とを、対照化させている。

14) 同書：196。

15) 同書：196頁。たとえばディルタイ(Dilthey, W. 1833-1911)は、その心理学的な類型論の視点から次のように述べている。「たとえばスケートをする人、あるいは踊っている人を観察しているとする。運動の適切さは、運動を把握することと分かちがたく結びついている。私は運動のイメージを、適切さと完全さの視点のもとで、類似した想起イメージと結びつける。……人間の生の表出のどのような部分についても、それが適切に遂行された場合の類型が成立する」(Über vergleichende Psychologie. Beiträge zum Studium der Individualität. 1895/96. Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften, V. Band, Göttingen (Vandenhoeck) 1957. S. 279)。認識行為の類型/原形(Typus)成立の機縁に触れており、興味深い。

16) 三木成夫『海・呼吸・古代形象』：28。

17) 触覚を含む皮膚感覚と、筋肉運動を含む運動感覚とから成り立つ感覚。中村雄二郎『共通感覚論』岩波現代選書、1983年：88, 108参照。

18) たとえばゲーテは「対象的思惟」について、次のように述べている。「わたしの思惟は対象から分離されないということ、対象の諸要素、諸直観が思惟に入りこみ、そして思惟によってきわめて内密に浸透されるということ、わたしの直観自体が思惟であり、わたしの思惟は直観である」HA. Bd. 13. S. 37.

19) 『人間生命の誕生』：198-199。

20) 同書：204。

三木氏は原形の体得ということについて、「それは言うて見れば、生前すなわち遥かに遠い祖先の彼方から、もっともっとわれわれの生命に直結した、それも夥しい物事に就いて行われて来たのでなければならぬ」<sup>21)</sup>と指摘する。氏の生命形態学のキーワードでもある「生命記憶」がここで登場する。たとえば氏は記「憶」の本字のなりたちを独自に援用しながら<sup>22)</sup>、きわめて直覚的に原形の生命起源に遡及している。「記憶とは、従って、おのれの至適条件を肉体に銘記する、それは「原形体得」のいわば根源の形態となる。その生命的な推移の故に、ひとびとはこうした本来の意味での記憶を「生命記憶」と呼ぶ<sup>23)</sup>。本能とは、いわば「生命記憶」の根源的な機能とされる<sup>24)</sup>。呼吸のリズムは、悠久の波打ちの生命記憶を反復し(羊水=古代海水説参照)<sup>25)</sup>、生命の波動は、食と性の位相交替のうちに脈動する<sup>26)</sup>。生命記憶の霞から立ち昇るおもかげは、回想経験の累積のうちに、永遠回帰している。

「内なる原形」の模索は、たとえば「或る時は「触覚」、或る時は「内部感覚」と呼ばれ

る共に鈍重な杖」<sup>27)</sup>を頼りに、なされてきた。言い換えるとそれは、視覚や聴覚などの特殊分化した感覚ではなく、触覚や運動感覚などの体性感覚や内臓感覚、いわばより根源的で未分化な生命感覚、感性のより古層/深層に根ざした感覚のうちに、映し出されてきた<sup>28)</sup>。生命の律動は、こうした始源の感性と共振・共鳴しあうとき、きわめて微妙な揺らぎや大きな振幅を示すであろう。次節では、リズムの問題を感覚論のなかで、さらに分節化してみる。

### 生命知としての共通感覚

さてリズムの問題を人間形成の場において、具体的に探る手がかりとして、ここできめて興味深い引用をしてみよう。関係に基礎をおいた情報記述の科学をめざす生命関係学の清水博氏は、『生命知としての場の論理 柳生新陰流に見る共創の理』(中公新書)のなかで、日本古来の伝統武芸である柳生新陰流(第21代道統 柳生延春氏)と、興味深い対話を試みている。

21) 同書：200。

22) 「もともと「憶」はその本字の象形が物語る様に、それは「言中也」すなわち「快」を意味する。いわば暑くもなく寒くもない肉体の快適な状態を表わした文字であるが、われわれのからだと言うものは、諸々の肉体条件の中から唯ひたすらにこの「憶」を求め、生活の大半をこの状況下で過すところから、何時の間にか根強くこれに馴染み、遂にはこれがおのれのからだの「いつもの」調子として、自らの肉体に「記」される」。同書。あるいは『生命形態学序説』：239以下参照。

23) 同書：200。

24) 同書。

25) 三木成夫『胎児の世界 人類の生命記憶』中公新書691,1983年：53。

26) たとえば、約24時間を周期とする人間の睡眠・覚醒リズムである日周リズム(circadian rhythm)など。

27) 『人間生命の誕生』：203。

28) ここでの諸感覚の区分は、特殊感覚(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、平衡感覚)、体性感覚(触覚、圧覚、温度覚、冷覚、痛覚、運動感覚)、内臓感覚(臓器感覚、内臓痛覚)という分類に従った。中村雄二郎『共通感覚論』：88参照。

たとえば、自分と相手とのタイミングを合わせる「拍子」について

柳生 「拍子」とは太刀の働きのことなのです。これはいわば生きたリズムというべきもので、自分の本心から出てくるものです。柳生新陰流では、太刀のリズムを「拍子」、心のリズムを「調子」と区別しています。つまり、自分の本心に内在する生きたリズムである「調子」から、生きた太刀のリズムである「拍子」が生み出される」<sup>29)</sup>。

柳生 「リズムというのは、敵に合わせるのではなく、自分の心に従っているべきもので、自由なのです」<sup>30)</sup>。

あるいは自分と相手とのリズムの差としてタイミングが合ってくることについて

清水 「それも科学的な言葉で表現するならば「引き込み現象」というもので、人間の持っているリズムの特徴なのではないでしょうか。それは、はじめは速さが異なっても一緒になっていくという現象です。心のリズムを共有する、と表現することもできるかもしれませんね。コヒーレントな状態というのは、心のリズムを共有している状態なんです」<sup>31)</sup>。

さらに清水氏は「心のリズム」を「生命のリズム」と見なす柳生氏の洞察を踏まえながら、場とリズムの関連を次のように指摘している。

「大脳には新皮質という理性とか客観的なものの見方、言語などを司っている部分と、その内部の古い脳、すなわち辺縁系と呼ばれる部分とがあります。辺縁系では、多くの場合、リズムを用いて情報を処理するのですが、まずこの辺縁系が先に働きだしてから、新皮質が働くという構造になっているようなのです。辺縁系での処理は単純な処理なので処理速度が速い。それに対して、新皮質のほうは非常に複雑な処理をするので時間がかかります。したがって、体の動きの本当に深い部分、いわば頭を使わない、より身体的な動きというものには、辺縁系が処理するリズムを基調とした脳の働きが大きく関わっているのではないかと、だからこそ、体の動きというものには何かリズム感が生まれてくるのではないかと、考えます。さらに、「場」という感覚ができるときにも、自分の体の中のリズムと、いわゆる「場」から来る情報とが結びつくというプロセスを経ているのではないかと、ということも考えています」<sup>32)</sup>。

場の論理を媒介としながら、「意識の深層にねざした一種の普遍的で潜在的な暗黙知」<sup>33)</sup>としての生命感覚から、リズムの起源を説きおこそうとするこうした試みは、人間形成論においても、きわめて示唆的である。清水氏は、押しつけられる秩序に対して「自己組織される秩序」(selforganized order)を区分し、教育の本質を「秩序を押しつけることではなく、生徒に秩序を自己組織することを体得させること」<sup>34)</sup>に見出し

29) 清水博『生命知としての場の論理 柳生新陰流に見る共創の理』中公新書 1333, 1996年: 173.

30) 同書: 174.

31) 同書: 176.

32) 同書: 177.

33) 清水博『生命と場所 意味を創出する関係科学』NTT出版, 1992年: 208.

34) 同書: 54. 換言すると、教育の最終的な目標とは、自己教育のできる人間の育成ということになるう。

ている．あるいは創造の原理を創出するために，学習された型からの解放である脱学習化(unlearning)の重要性を指摘する<sup>35)</sup>．

ところで生命感覚あるいは生命知といった深層(意識)の知の視点から，リズムの生成を解き明かす試みは，きわめて広汎な問題を孕んでいる．それは同時にまた，共通感覚(sensus communis)あるいは構想力(Einbildungskraft)の問題とも深く交叉していよう．たとえば木村敏氏は，「生命の根拠」を「振動として，あるいは響きとしての生命」<sup>36)</sup>とも表現する．すなわち分裂病者においては，絶対の他としての生命の根拠との関係が排除されており，「世界との生命的共鳴の失調」<sup>37)</sup>として，その主体性の確立は障害されている．「分裂病者では「物」の世界との生命的共鳴関係が十分に成立していない．そのために現実との「こと」的な関わりが自明性を失い，この根拠関係そのものであるところの主体性が単に自己意識の面における「主体性」だけでなく，有機体全体としての主体性がその根拠を奪われることになる」<sup>38)</sup>．生命の振動と共振・共鳴しあい，生成の微少な揺らぎを受容する生命感覚，そこにメタノエシス的

感覚<sup>39)</sup>としての共通感覚の存在が認められる．

個々のノエシス的な感覚作用をそれ自体，さらにノエシス的に知覚・統合する根源的な感覚作用としての共通感覚，これが生のメタノエシス的の原理である．それはもはや感覚受容的な受動的な感覚ではなく，能動的な行為の原理である．木村氏は「間(あいだ)」の根本性格を，それを空間的な広がりではけっしてなく，「個人や集団が生命の根拠に支えられて世界と出会う行為的な原理」であると指摘し，間主観的な「あいだ」そのものが，共通感覚である，という洞察を示している<sup>40)</sup>．共通感覚の病としての分裂病は，生の根本基盤である生活世界の自明性を喪失させる．

ところで中村雄二郎氏は『共通感覚論』において，「運動図式(ベルクソン)」，「身体図式」(メルロ・ポンティ)，「キネステーゼ」(フッサール)等の身体原理の考察を参考にしながら，共通感覚を体性感覚に基づけて理解する．そこで中村氏は，触覚に代表される皮膚感覚と，筋肉感覚を含む運動感覚からなる体性感覚による，諸感覚の遠心的な統合作用に着目している．近世以来，絶

35) 「これまでの脳のネットワーク理論や人工知能の理論には，この脱学習はありません．無数の特殊を集めれば普遍が生まれてくると考えているからです．したがって，そこにあるのは学習の理論ばかりです．……知識の学習ばかりでは，学べば学ぶほどシステムが硬直し，自由度を失っていきます．そのために脱学習ということが必要になってくるのです」清水『生命知としての場の論理』：85．

36) 木村敏『生命のかたち／かたちの生命』：89．

37) 同書：93．

38) 同書．

39) アリストテレスは共通感覚を，すべての感覚に共通している感覚という意味と，個別感覚の感覚作用を感覚する根源的な感覚という意味の二通りに用いた．「この感覚は，ノエシス的な作用を誘導する高次のノエシス的の原理として，メタノエシス的な性格をおびているにちがいない」木村敏『あいだ』：63-64．

40) 同書：66-67．

対優位を占めてきた求心的な視覚作用に対して、体性感覚による統合は、表面感覚(触覚)から深部感覚(無意識的な内臓感覚)までを貫く遠心的な拡がりをもつものとされる<sup>41)</sup>。「体性感覚はこのように表層感覚であるとともに深層感覚であるから、一方で視覚、聴覚、臭覚、味覚などと結びついて外部世界に開かれているとともに、他方では内臓感覚と結びついて暗い内部世界へも通路をもっている。体性感覚は、このように、外部世界と内部世界との両方にかかわり、両者に相渉っている<sup>42)</sup>。外部と内部を媒介しつつ、能動的に意味賦与することによって潜在的な志向図式を生成する根源的な感覚、それが体性感覚的統合としての共通感覚と理解される。そこでは外部と内部、能動と受動、時間と空間、運動と知覚が相互浸透的に交叉しあい、律動しあっている。

さて中村氏は、時間ならびに空間のリズム的分節に留意しながら、リズムの感覚を、体性感覚的統合の働きによるものと指摘している<sup>43)</sup>。それは精神病理的には、他者とのあいだに自然な間がもてない、あるいはタイミングを計れない、という分裂病者の主訴とも深く連動している。たとえばタイミングの失調の事例は、共同的に形成された社会的・文化的時空間の歪みを映した

していよう(コモン・センスの病)。すなわち生きられるリズムは、身体に深く根をおろしつつ、社会的・文化的に制度化された重層的時間のうちに多様に脈動している。「私たちの生きる時間とは、……さまざまなリズムをもって循環する複数の時間系列を含む、重層的な時間にほかならない<sup>44)</sup>。ここで中村氏は、時間あるいはリズムの問題を、社会的・文化的コモン・センスとしての「常識」の視点から導出する。「自然のリズム(時間)の上に歴史のなかで形成された一つの国や地方での社会的・文化的リズム(時間)こそが、なによりも、人々の間での共通の知覚や判断としてのコモン・センスの基礎となっていると考えられる<sup>45)</sup>。

こうした社会的・文化的リズムの歴史的生成は、きわめて興味深い構造をそなえている。たとえば美学の中井正一氏は、その特異なエッセー「リズムの構造」<sup>46)</sup>において、リズムの数学的解釈、存在論的解釈に加えて、歴史的解釈を呈示している。すなわち時間を数的本質構造(客観的法則性)へ射影して解釈する数学的解釈、内面的時間を構成する人間学的構造(現存在的把握性)に基づけて解釈する存在論的解釈、そして時間を弁証法的構造から解釈する歴史的解釈である。「リズムもまた、時代の様式の中

41) 「この統合もあるいは最終的には脳によって行われるにせよ、それは一たび全身に拡散し、その拡散をとおした上で行われる遠心的統合、基体的な統合である。さらにいえば、それは主語的な統合ではなくて、述語的な統合である」中村『共通感覚論』: 114。

42) 同書: 112。

43) 同書: 117。

44) 同書: 252。過去から未来へと均質に流れる水平・直線的な時間(ニュートン物理学による抽象化された絶対時間)とは別に、われわれが生きる時間は、たとえば日周リズムにもとづく有機的な自然的時間、社会的有効性に仲立ちされた社会的時間、交感や同化に媒介されて回帰する文化的時間として、詳細に分析されている。

45) 同書: 255-256。

46) 岩波文庫『中井正一評論集』所集, 1995年。

にその構造を変容しつつ発展するのではないかという問い<sup>47)</sup>は、その社会的・文化的構造を見極めるのに、きわめて示唆的である。中井氏は、数学的解釈あるいは人間的・存在論的解釈では及ばないリズムの現象として、たとえばボートのタイム記録の例を出している。「それは、八人なら八人が構成する一艇のタイムの記録が数週間の練習記録において必ず一つのリズム的なカーブを描くのを経験する。それは野球における打数においてもあらわれるものであり、そのカーブの底部を一般にスランプという不可解なる語をもっていいあらわしている。それは一人一人の体力においてもすでにあらわるものがあるが、チームにおいてはその合成ならびに合成以上に一つの性格としてそのカーブをもっている<sup>48)</sup>。リズムの歴史性に着目し、個人を超えた集団的次元でリズムを考察しようとした中井氏のこうした考察は、きわめて注目に値しよう。

### 構想力と生命感覚

ここでリズムの歴史性あるいは歴史のリズムという論点を踏まえながら、構想力の問題へと論を進めたい。先述したように、

生のメタノエシスの原理とは、「すべての個別感覚を統合する原理としての共通感覚」であった。木村敏氏はこれに続けて、このメタノエシスの原理を構想力(想像力)であると見なし、構想力が、個々のノエシスの行為に「先立って」いる点を指摘している<sup>49)</sup>。引用してみよう。「主体間の「人と人とのあいだ」が主体の内部にメタノエシスの原理(第二の主体)として「取り込まれ」、それと個々のノエシスの作用(第一の主体)との間に「主体内部的な「あいだ」が成立して、これが一種時間的な「ずれ」の性格をおびるということであった。このメタノエシスの原理は、個々のノエシスの行為を方向づける共通感覚ないし構想力として、個々のノエシスの行為につねに「先立って」いる。だからこの時間的な「ずれ」はつねに未来へ向かっての「ずれ」だということになる<sup>50)</sup>。ここで共通感覚が、きわめて実践的な感覚であり、また能動的な行為でもあること<sup>51)</sup>を想起するなら、それは未来志向的なメタノエシスの原理としての構想力の特徴も明確に示唆していよう。「未来は方向であり、過去は蓄積である。時間というものに方向が不可欠だとするならば、生命にとって唯一の時間は未来への前進であって、過去は時間ではない<sup>52)</sup>」。

47) 同書：113。

48) 同書：115。中井氏は、リズムの歴史性を映しだす装置(歴史の深い内面の暴露)として、近代テクノロジーの所産であるトーキーによる表現に期待する。また中村雄二郎氏は、こうした中井氏のリズム論が、十分に展開されなかった理由として、その分析が直観に頼りすぎていたため、とも論じている。『共通感覚論』：300参照。

49) 木村敏『あいだ』：80。たとえば、「音楽の演奏を方向づける作用がすでに鳴った音楽からだけでなく、これから演奏しようとしている「楽想」からも働くということ」「まだ実現されていない音楽を想像力によって表象することなくしては、演奏は不可能」なことが、その例として、挙げられている。

50) 同書：84。

51) 同書：67。

52) 『あいだ』：83。

このことは先にも触れたように、分裂病者の主訴のなかにあるタイミングの失調とも深く連鎖していよう。周囲の他者との対人関係において、タイミングが合わない、タイミングがずれる、タイミングが狂う、タイミングで負ける、フライングしてしまう、間がもてない、など表現の綾は微妙ではあるが、その違和感は根底的なものである<sup>53)</sup>。木村氏は、こうしたタイミングを「生命の根拠との接触」<sup>54)</sup>とも言い換えて、そこに自己の同義語とも見なせる共属関係を認めている。すなわちメタノエシスの原理の失調は、ただちに生命感覚に反映する。病理的なタイミングの「ずれ」は、みずからの生命根拠との共振・共鳴関係の失調であり、生命リズムの変調でもあろう。

さてここでカントにならって、構想力を「人間の認識の二つの幹」である感性(純粹直観)と悟性(純粹思惟)を統一している「おそらく一つの共通の、われわれには未知の根」(超越論的構想力)として理解しておこう。あるいはハイデガーにならえば、「自発性である以外に「更に」なお受容性でもあ

るというに止まらず、むしろ構想力は受容性と自発性との根源的な統一であって、後から合成された統一ではない<sup>55)</sup>と理解される。感性と悟性の統一、受容性と自発性の統一。ここから更に構想力について、きわめて興味深い洞察が導きだされる。自己と他者の関係に通底し、間主観的な「あいだ」としての拡がりをもつ構想力は、同時にまた心と身体の境界を切りむすぶ。「空想とか構想力とか呼ばれる機能が人間の心と身体との「繋ぎ目」で「第二の被膜」として働いていて、両者の緊密な関係を維持すると同時に両者の境界をはっきり区別してもいるということ、一方またこの同じ空想や構想力の働きが、他人との「あいだ」の感情交流というような現象をも動かしている<sup>56)</sup>。(以下、後編に続く)

〔付記〕

本稿は、1999年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)による成果の一部である。

53) 同書：103-104参照。木村氏は、タイミング(timing)という言い回しが、日本語では重要な日常用語として頻用されている事実に着目し、それは時間の現象を客観化可能な「もの」としてではなく、「タイムがアクチュアルに「タイムする」、その一瞬の微妙な動きを「タイミング」として捉える特別な感覚に古来長けていたのではないか」とする興味深い洞察を示している。

54) 同書：122。

55) ハイデガー『カントと形而上学の問題』木場深定訳、ハイデガー選書19、理想社、1981年：168

56) 木村敏『あいだ』：101。